

スクール・モットーを実践できる学生育成システムの構築

研究代表者 経済学部・教授 寺本益英

1. 研究の目的

関西学院大学のスクール・モットーは“Mastery for Service”であるが、日々の大学生活の中で具体的にどのように実践すべきかに関しては、教職員・学生とも試行錯誤を重ねているのが現状ではなかろうか。私たち共同研究のメンバーは、スクール・モットーを実践できる教育とは、知識の集積や資格取得に力点を置く教育ではなく、「人間教育」であると考えた。もちろん種々の講義において標準的なテキストに記載されている内容を理解させることは重要であるが、関西学院の教育が他大学とは異なる魅力をアピールするなら、講義や諸活動の中に、命への尊厳、他者への思いやり、感動する心など、まず人間性を豊かにする要素を取り入れ、実践することが要請される。

さらに安心して暮らせる社会の構築、幸福を実感できる政策のあり方など、社会・経済全般の改善につながるマクロ的方策の提案力を養うことも、専攻分野に関係なく最も大切なテーマであると考えてきた。3月11日に発生した東日本大震災は、甚大な人的・物的損害を及ぼすとともに、原発事故における放射能漏れが一段と問題の解決を困難にしている。今後は国民が総力を結集して対処しなければならず、ひとりひとりの関学関係者にも冷静な判断力と温かい心が求められている。

私たちは以上を念頭において研究チームを組織し、学部横断型の新しい教育プログラムを開発することを目指した。企画の独創的な点は、兵庫医科大学や明和病院と連携しながら、医療現場や医学教育におけるノウハウを、関学の教育の中にも取り入れることである。

「命を救う」という究極の場面に直面する医師の倫理観やチーム医療の精神を学びながら、関西学院や聖和大学の教育の中で進化・発展してきた理念・ノウハウとうまく融合させ、社会に大きな貢献ができる人材の育成を目指し活動を行った。

2. 活動内容

まず外部講師を招いての研究会を2回開催した。1回目は、2010年8月9日、兵庫医科大学医学教育センター長の鈴木敬一郎教授を迎え、「医学教育における動機づけと学習支援」というテーマで研究会を実施した。鈴木教授は、最近の学生の特徴や行動パターンを

的確に分析した上で、兵庫医科大学ではどのようなカリキュラムを組み、医師養成を行っているかについてお話しになった。とりわけ学生の途中放棄を許さない工夫された教育システムは、関西学院大学における講義の充実度を高める上で大いに参考となった。

2回目は2011年3月26日、明和病院の山中若樹院長に講師をお引き受けいただき、「組織の成長と展開を目指して -How I do it?」というタイトルの研究会を開催した。研究会では最初山中院長より医師としての使命のほか、肝臓病治療の工夫、行き届いたチーム医療の手法、人材育成のノウハウなど、医療の質向上に向けて実践されている様々な取り組みを紹介していただき、その後病院運営を大学運営に置き換え、教職員がやりがいを持って働き、学生が生き生きと大学生活を送れるための条件は何か、活発な意見交換が行われた。

続いて学内共同研究者の取り組みを紹介しておきたい。まずキリスト教保育を専攻する久洋子氏は、特にページェント（降誕劇）を通して愛・感謝・命の尊さ・共にひとつのことに取り組むことの大切さ・平和への祈りなどをいかに学生に訴えてゆくべきか研究した。また障害児保育が専門の和田薫氏は、子どもの障害の特性をよく理解し、正面からきちんと向き合って接することの大切さ、差別や偏見をなくすことの重要性をどのように学生に伝えてゆけばよいか、説得力のある講義法を種々検討した。両氏の研究成果は2010年10月6日、「授業を通して、建学の精神をどのように伝えようとしているのか」という演題の研究会で報告された。

長島礼氏は音楽教育を専門としている。どのようにすれば子どもが自ら関心を持って音楽と関わり、豊かな心を育みながら成長してゆけるのかに焦点を絞り、研究を重ねた。その成果は、2010年12月13日に行われた研究会+演奏会「音楽の贈り物」において報告された。

寺本益英（研究代表者）は、日本経済史の専攻であるが、本プロジェクトでは、医学教育や病院のチーム医療の手法を研究した。KG梅田ゼミ「医療の最前線から生命（いのち）を語る」を担当する6名の医師・看護師に、医療現場での心得、患者への対応、勤務する病院の社会的役割など、様々な角度からインタビューを行い、関西学院大学の構成員である教職員・学生はどのような理念を持って行動すべきか、いかにして各自の与えられた責任を果たすべきかなどを検討した。

大西和明氏と在田憲史氏は、昨年度まで総合教育研究室において、寺本益英（研究代表者）とともに高等教育や生涯学習の望ましい姿についてたびたび意見交換を行い、企画も

実施してきた。今回大西和明氏は長年の職務経験を生かし、キリスト教主義教育、学生が充実感を得られるキャンパス環境の整備、学生の大学生活に対するニーズの把握とその実現のための道筋について提案を試みた。在田憲史氏は、履修面のみならず日々の大学生活、就職相談に至るまで、入学から卒業までの一貫した学生支援の方策をさぐった。その際、特に教員と職員の連携について具体策の提案を試みた。

3. 共同研究の成果と今後の課題

本共同研究最大の成果は、すぐれた「医の心」や医学教育の手法を学び、関西学院活性化に直結する多くのヒントが得られたことである。

例えば医師・看護師・薬剤師の緊密な連携のもとに進められるチーム医療は、迅速な問題解決につながり、患者のQOL向上に貢献する。これを関学の教育に置き換えれば、ゼミの担当教員が主治医の役割を果たし、各部署の事務職員と連絡をとりながら学生生活の悩みを解決したり、就職の相談にのったりすることになる。スタッフの豊富な大学病院や1学年が100名程度の医学部と同列に扱うことはできないが、学習意欲がわかなかつたり、進路の選択で迷っている学生に対しては、複数の教職員で対処することが効果的であるという結論を得た。また症例の蓄積が病院の評価を高めるのと同様に、様々なケースにおいて学生にどう対応し、どのような結果が得られたかという情報を共有するしくみづくりが重要であるという認識を得た。

教育の質保証に関しても、工夫の余地がある。医学部では、国家試験の突破を目指し、医師として求められる知識、技術、コミュニケーション能力を身につけるためのカリキュラムが設定されている。習得すべき知識や技術が標準化されており、一定のレベルに到達しない学生は進級が認められないのが医学部教育の特徴である。本学においても、各学部で最低限必要な能力を具体的に定め、一定の強制力をもって身につけさせるような制度を構築すべきである。

また医学部教育では、単に専門知識を詰め込むだけではなく、学生一人ひとりに対して：幸せな医療専門職（医師）としての人生が送れるようなきめ細かな指導が行われている。本学でも初年次教育の必須項目として、各学生がスクール・モットー“Mastery for Service”を大学生活の中でどう盛り込み、将来どのような職業についてどういった社会貢献ができるかを自信をもって明確に語れるよう誘導することが大切であると考えた。

以上のとおり、今回の共同研究を通し、我々はスクール・モットーを実践しようという心が

ける学生をいかに育てればよいか、様々な方策を見出すことができた。

今後の課題は、より多くの教職員・学生が絶えず“Mastery for Service”の意味を問い直し、深化させられるような環境を整えることである。個人で考えるよりは、ひとりでも多くのメンバーの意見を取り入れる方が濃密な内容となるだろう。また理念の共有に成功すれば、結束力が高まり、一段と大きな力を発揮できるに違いない。

公式の研究期間はひとまず終了したが、現在研究代表者の寺本益英は、前述のKG梅田ゼミ「医療の最前線から生命（いのち）を語る」の担当者の講義内容や聞き取り調査を冊子にまとめており、いずれ公表する予定である。これによって、医療現場での取り組みや、医療従事者の職業倫理が明らかにされるだろう。その後より丁寧に、スクール・モットーと重ね合わせる作業を行うつもりである。加えて共同研究者を中心とした成果報告会的なシンポジウムを開催するとともに、今回の共同研究者以外の教職員にも協力を要請して研究会を実施し、活動の幅を広げてゆきたいと考えている。